

**<エッセイ> 日文研データベースの将来を考える :
「平成二八年度『デジタル技術を用いた支援ツールの活用による研究成果の可視化』に関する研究会」
に参加して**

著者	光平 有希
雑誌名	日文研
巻	58
ページ	44-49
発行年	2017-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00006513

日文研データベースの将来を考える

―平成二八年度『デジタル技術を用いた支援ツールの活用による研究成果の可視化』に関する研究会』に参加して―

光 平 有 希

はじめに

「平成二八年度『デジタル技術を用いた支援ツールの活用による研究成果の可視化』に関する研究会」が一〇月一七日に江戸東京博物館で開催された。これは人間文化研究機構が進める「在外資料調査・研究・活用」事業のうち、「ヨーロッパにおける一九世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」研究班の「活用」部分の事業の一環である。同研究会では、この班の中心となる日高薫氏（国立歴史民俗博物館・教授）、原田泰氏（公立はこだて未来大学・教授）、鈴木卓治氏（国立歴史民俗博物館・助教）により、プロジェクトの成果としての研究情報発信や共有化、特に展示を通じた活用に関して、デジタル技術を援用した支援ツール開発の実例が報告された。なお、日文研は全体の事業に関わる四つの研究班のひとつとして責任を担っており、本稿では、研究会での報告内容をまとめた上で、日文研所蔵史料の可視化にはどのような手掛かりを見いだすことができるのかについても、少し考察してみたいと思う。

1. 研究会の報告

「ヨーロッパにおける一九世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」研究班は、六年間に亘るシーボルト関係資料の総合的な調査によって得られた成果を広く発信するため、二〇一六年七月より国立歴史民俗博物館（以下、歴博と表記する）など五つの博物館において、「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」という企画展（巡回展）を開催している。同研究班では企画展開催にあたり、これまで収集・調査を行った八千点以上に及ぶ膨大な情報量の研究成果を可視化するため、映像やプロジェクトションマッピング、デジタルアーカイブなどの支援ツールを用いた成果の効果的な発信方法について、長きに亘り検討が行われてきた。

一般的なデジタルアーカイブは、資料を一点一点詳細に見せることに特化した提示を行っている。そのため、複数の資料を見比べることは難しく、時代の遷移や地域、材質の違いによる特徴など、複数の資料の関係性を読み解きにくいという難点が見受けられる。また、博物館展示では、各資料が展示の意図を伝えるために工夫して配置されるのに対し、デジタルアーカイブでは各資料が種別ごとに整理されているとは言え、全ての資料がリスト状に表示される。それゆえ、デジタルアーカイブを博物館展示で利用する場合は、利用者に専門家の意図や展示の意図が伝わるよう工夫した資料の表示が求められている。

このことを受け、同研究班では、博物資料の関係性を視覚化し、歴史研究者の視点や展示の意図をデジタルアーカイブの利用者に体験的に伝えることを目的として定めた。そして、ほかに未来大学の原田泰氏、及び同大学の大学院生と連携して、複数資料の関係性を視覚的、動的に表現し、展示空間においても一般のパソコンでも利用可能なデジタルアーカイブビューアー

の構築を行った。その構築過程においてまず行われたのが、「歴史研究者の資料の見方に関する調査」であった。はこだて未来大学の学生が、展示プロジェクトを進めている歴史研究者五名を対象に半構造化インタビューを行った結果、観察する資料種別が異なっても共通する資料の見方として「新たな資料を分析する際は形状や模様、技法などが似ている資料をみつけて比較する」、「資料の全体像からある部分へ注目する粒度を変えながら観察する」という特徴が抽出された。そして、これらの特徴を視野に入れつつデジタルアーカイブビューアの構築が行われることとなった。

さて、デジタルアーカイブビューアのもととなった、ミュンヘン五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクションのデジタルアーカイブ（同研究班が作成）では、市販のFileMakerが使用されている。そして、それを発展させたデジタルアーカイブビューアは、展示会場内でのタブレットによる利用を想定し、「HTML、JavaScript、MySQLをベースにwebアプリとして開発されている。また、同ビューアには、利用者が専門家に近い視点から資料観察を体験できるように、資料について図解表現を用いたレイアウトに並び替える「資料構造の解体・再構築」、そして、類似の特徴を持つ資料を集めて表示する「資料の解散・集合」という二種類の資料提示方法を設計した点に特徴がみられる。

具体的には、「資料構造の解体・再構築」では、利用者は自身の興味に沿って画面上の資料レイアウトを変更することができる。例えば、各資料種別に並び替える場合には、企画展で扱う資料が何を中心に集められたのかが判別できるよう、種別ごとの資料点数の割合が視覚的に表示される。さらに、年代順に並び替える場合には、西暦が書かれた年表に資料がマッピングされるといふシステムになっている。この提示方法は、資料の関係性を視覚化し、分かりやす

く提示するだけでなく、利用者自身が興味・関心に沿って見え方の構造を変化させることで、資料間の関係性の理解・解釈を促すことを意図している。一方、「資料の集合・解散」では、利用者は資料を持つある属性（年代、地域、材質など）と共通する属性を持つ資料だけを集めて表示することができる。これにより、利用者は気になったサムネイル画像やキーワードを選択していくだけで、資料間の共通性を発見できるほか、より専門的な関連を持った資料を閲覧していくことが可能となっている。

2. 日文研での応用

歴博は、「資源」「研究」「展示」という三つの要素を有機的に連鎖させて、積極的に「公開・共有」を進めることにより、博物館研究統合に努めているという。その中で、今回は、既存のデジタルアーカイブを企画展において発展的に活用することによって、研究内容を広く発信することに成功していた。ただし、これは研究成果を「展示」という形で発信する場所を常に有する歴博だからこその特徴でもあり、そのままの形で日文研に应用することは困難である。しかしながら、架空の企画展の場合が日文研所蔵資料の各データベース上であると仮定した場合、研究部と情報課との緊密なさらなる連携のもとで、各データベースの特質や利用者に合わせて、分類や表記の再考、また、利用者が求めている資料に素早く、なおかつ広い情報を付加させながら辿り着く道筋の検討など、新たな検索システムの立案・運用・活用事業の展開も可能なのではないかと考えられる。

私は、日本関係文図書（外書）を中心とした貴重書データベース、そして野間文庫データベースに関する業務に従事しているが、所蔵資料の認知及びそれらの新規資料利用者の確保に

は非常に長い時間を要するものと日々実感している。貴重な所蔵資料があり、それを公開するためにデータベースを構築する。しかし、それだけでは開かれたデータベースとしての役割は果たせていない。今回の研究会を通してその先にある閲覧者（研究者・一般の人）が「利用する」という視点をも常に意識していなければ、せっかく構築したデータベースの価値や意義まで衰退してしまう可能性が大いにあるということを改めて痛感した。

また今回、研究会で報告されたデジタルアーカイブビューアーでは、全体を通じてアニメーションを利用した画面遷移を行っている点も特徴的であった。日文研のデータベースでも利用者が自ら探求してみようとする利用行動を促進するためには、アニメーションによる演出によって、資料を検索・観察していく経験を魅力化し、コンテンツへの積極的な関わりを促すということも必要となってくるのではないかと考える。例えば、貴重書データベースで考えるならば、データベース上において、利用者がある一つの著作を検索した際、それと同時に、その著作に類似した内容や言語の著作、あるいは検索された著作の別刊本などをシステムが予測して、その著作のタイトルページが流動的に画面の上下で提示され、利用者に今後読むべき著作として提案してくれたならば、私も一利用者としてとても嬉しい。

さらに、前述した「研究者の視点を反映する」という観点も日文研のデータベース、あるいはその附属Webサイト構築の際にも有効に応用できるのではないだろうか。資料を「提示する」「検索できる」だけではなく、その資料を扱う専門家の見方も投影することによって、各資料のみならず該当研究自体の魅力の発信にも繋がる。貴重書データベースの場合、各著作の全ページを閲覧・ダウンロードできる既存データベースの導線として、今後作成予定の附属Webサイトでは、データベース掲載全著作の解説を加えるほか、複数著作に描かれている同

一テーマの挿絵を比較分析してその特徴や面白さを伝えたり、各著作の時代背景、あるいは装丁や紙に関する知識などを得られるコンテンツを充実させることも一つの手だと思われる。さらに研究会で得た知見の中で、今回の研究班のように主要機関を基盤としながら他大学と連携することを模索するということも非常に興味深い。例えば京都内の他大学と連携することにより、広い視野のもとでのシステム構築が進むと同時に、研究公開の場におけるデジタル技術の応用を巡って、地域への貢献、また新しい教育現場形成への貢献も模索できるであろう。

この度の研究会参加は、そこで得た知見や技術を日文研という機関の性格に応じて取り入れることにより、既存データベースの可能性がさらに拡がってくるかもしれない、そんな期待に胸を弾ませた時間でもあった。最後になるが、会場を提供してくださった江戸東京博物館に感謝の意を述べたい。

(国際日本文化研究センタープロジェクト研究員)